

「ビルマとシャン」「ミャンマーは『最貧国』か」など7篇。

VI章 イギリス…「イングランドとスコットランド」「ローマ北辺のブリテン島」「イングランドの内陸水路」「スコットランドの景観」など8篇。

VII章 北ヨーロッパ…「氷食の大地—ロフォーテン—」、「北極圏の鉱山と港湾都市」、「少数民族サーミとその生業」など7篇。

VIII章 カナダ…「ウェラント運河とリドー運河」「カナダ西部の先住民族」「カナダの日系移民」など7篇。

IX章 ハワイ…「ハワイ王国時代の暮らし」「ハワイにおける日系移民」「ホノルル市の都市構造とエスニック構成」など8篇。

X章 オーストラリア…「タスマニアの自然」、「ローンセストンとホバート—タスマニア島のライバル2都市—」「フロンティアの拡大とその史跡」など7篇。

ちなみに各章ごとに地域概観の節も設けられている。

以上のように、地理の教科書でも頻出度の高い地域や場所、事項がとりあげられてもいるが、意外に「知っているつもり」で知らなかった事例も多く、新たな知見を多く得ることができた。巻末に参考文献リストが付されている点も親切である。評者がとくに興味深く読んだのは、近年、外国人観光客の受け入れが盛んになりはじめたベトナム・カンボジア、ミャンマーに関する章である。国際政治がらみのトピックスとしては、これまでもしばしばとりあげられてきた地域であったが、日本の「地理・地誌」において、どちらかと言えば「テラ・インコグニタ（未知の大陸）」的世界ではなかったか。またタイ編の「チェ

ンライとチェンマイ」、ハワイ編の「ハワイ王国時代の暮らし」、オーストラリア編「ローンセストンとホバート—タスマニア島のライバル2都市—」なども、これまでの地誌書ではなじみの薄い場所や事項である。

各節3～5頁というわずかな分量であるとはいえ、いずれも「ジオグラファーズ・アイ」を通して撮影された写真や地図など参考資料がふんだんに挿入されており、記述内容も簡潔平易明瞭高濃度である。現地へ行き、既習内容との差異をめぐってあれこれ思考しなければ「発見」できなかったであろう新鮮な地理情報も盛りだくさんである。やはり「百聞は一見に如かず」なのだ。本書の刊行は、地理教科書や地名辞典の書き換えという静かな波紋をかきたてるかもしれない。

III

本書の書き手は故人も含め、総勢46名に及ぶ。いずれも「野外歴史地理学研究会」、略称FHGの会員である。同研究会の成り立ちや本書が刊行されるに至った経緯については、本書「はじめに」が詳しいが、本書未見の若い読者のために簡単な紹介をしておこう。

同研究会は、かつて京都大学旧教養部や奈良大学文学部において教鞭をとられた伝説的地理学者・藤岡謙二郎先生が主宰者となって1966年に組織された「野外歴史地理」同好者の会である。会員の多くは、藤岡先生の薫陶を大いに得た方々であり、小中高の教員のみならず、会社員・実業家・店主・医師・僧侶・主婦・学生などさまざまな層の人々から成っている。主な活動は、年4回のペースで日本国内各地をバス・ツアーし、現地討議を行なうというもので、同先生が85年に他界さ

れるまでの約20年もの間、続けられてきた。そして同先生没後の5年間、同会の活動は休止されたものの、89年には「現地に学ぶ」という所期の精神を受け継ぐかたちで「ニューFHG」として復活。以来、1年間に3回、うち1回は海外へ、「野外巡検」（現地講義・討議を伴うエクスカージョン）を実施してきた、という。実に息の長い活動歴である。

さらに同会について特筆すべきは、「野外巡検」のたびごとに、訪れる場所に関連する分野の専門家によってレジュメが事前に作成され、巡検終了後には参加者による文集が編まれてきたという点にある。本書は、過去10年間にわたって13カ国を「野外巡検」してきた「ニューFHG」の活動の成果を集大成したものである。しかし、同好の会にありがちな、会員だけしか共有できない内向きの記録集ではなく、その東奔西走地球巡歩的活動記録の一端を、地理同好者による「世界地誌小品集」のかたちで不特定多数の会員外の人たちにも供しようとしたものである。だからこそ

「ニューFHG」の会員でなくとも「読める」のである。

惜しむらくは、本書の執筆者のほとんどが教員であった、という点である。教育・研究分野以外の、あるいは学術的文章を執筆することに余り縁のない会員諸氏の執筆も含まれてしかるべきではなかったか。そうした人々の「心象地理的エッセイ」も交えられていたら、「野外巡検」の醍醐味や効能が、広く読者に伝えられたのではないかと思う。なお余計なことを言えば、「野外歴史地理研究会」の連絡先が記されていないのは残念である。本書に感化され、同会への入会を希望する読者がいるかもしれないのに…。

ともあれ、「ニューFHG」が本書をもって最後の活動成果公刊とすることなく、さらにアフリカ、南米、中央アジアなどにも足跡を残され、続編、続々編を刊行されることを期待したい。

（立命館大学文学部 藤巻正己 記）